
星詠みと流星

黒崎メグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星詠みと流星

【Nコード】

N7898S

【作者名】

黒崎メグ

【あらすじ】

星詠みは命を削って星を詠む。

皇帝の権力の下保護された地シユーレで暮らす星詠みの少女セラは、皇帝の命に従い命を削る日々疑問を覚えながら暮らしていた。そんなある日、セラは不思議な少年に出会う。少年を通じて外の世界に興味を持ったセラは少年と共に旅に出る決意をするのだが、二人は次第に、東の大国ガレと西の大国ドレナの争いに巻き込まれていく。

【1】

セラがその音に気付いたのは本当に偶然だった。北の地のひどく乾いて鋭い風の音に乗って、どこかで聞いたような鈴の音が聞こえる。セラが今いるのは里の中央に位置する広場の西側だから、どうやら音は里を南北に走る通りの南側から聞こえてくるようだ。風除けとして、ぼろ布を張った棒が立てられた店の軒下から兄と共に顔を出せば、死者を見送るための葬列が進んでいくところだった。彼らが向かう先は北の樹海の中に作られた墓地だ。現に、それは白と黒の不思議な列をなし、村の中央を南北に走る大通りを、北に向けて歩んでいく。

黒は、黒い麻布のマントを身に纏った棺の担ぎ手で、白い前開きの羽織に袖を通し、濃紺の帯を締めてそれを先導するのは死者の縁者と村長だ。むらおさ

黒を纏い木製の棺を四人がかりで担ぎあげているのは帝国兵だろう。

セラはその銀色の瞳で葬列を追いながら、そう結論付けた。黒いマントの下からする鎧と剣がぶつかり合う金属音は隠しきることはできないし、何より里の者なら葬列には必ず膝丈はある白い羽織を纏う。セラが聞いたのはその羽織の裾袖に縫いつけられた鈴の音だったのだらう。

セラは三年ほど前に両親の葬列に参加したことがあるから覚えている。あの頃は、村人しか葬儀に参加していなかったから、まるで夜空の天の川のように綺麗な白の流れができていた。しかし、ここ数力月は、その白い流れを汚すように、黒衣の男達が葬列の中に入り込んでいた。悲しみを慰めるようになる澄んだ鈴の音は、剣と

鎧がぶつかる無粋な音に邪魔されて、死者にもその縁者にも真の意味で響くことはない。

セラはそれを残念に思うと同時に、口にはしない怒りさえ覚えていた。

それほどまでに、ここ数カ月で目にした葬列の数は多い。セラの気持ちを代弁するように、同じく葬列を見送っていた兄は、

「今月に入って、二人目だな。いったい誰が亡くなったんだ？」

と、言った。後ろで、籠に荷物を詰めていた店の主人がその声に反応して、半ば独り言のように呟く。

「ありや、ロウの葬列だ。可哀そうにまだ二十歳にもなっていないってえのに。優秀な星詠みでさえなけりやあ、もうちょっと長生きできたのによお」

そういう主人もまた、先日長年連れ添った妻を亡くしたばかりであった。だが、悲しいことに、家族の死は、ガレの北の端に位置するシユーレの人々にとっては酷く身近なものである。それでも、家族の死が悲しいことに変わりはないし、それを受け止めるには時間がある。セラとて三年前に亡くなった両親のことを思うと今でも涙が出るし、両親の死と共に心に開いた穴は今も塞ぎ切れずにいる。だが、セラには不思議でならないことが一つだけあった。シユーレの人々がこのようなことになる原因を作った人物を恨むそぶりを見せないことだ。

その証拠に、

「ロウって、歳は兄さんと五歳も離れていないよ。この間まで、一緒に外の世界を見てみたいねって話していたばかりだったのに……」

と、セラが恨めしそうに呟きを漏らせば、セラと同じ銀色の瞳を細めて、兄は、

「でも、ロウは皇帝陛下のために死んだんだ」

と言う。けれどセラは、やはりその言葉に納得できない。否定の意を込めて、先程より強く首を横に振れば、寒さ対策に羽織った鹿革のマントのフードが落ちて、シユーレの民特有の月明かり色の髪が乱れた。

「私たちを助けてくれているっていうならなぜ、皇帝はあんなに沢山の命令を出すの。私たちが、魂の一部を飛ばして星を詠んでいるのは知っているはずなのに」

「皇帝陛下は俺達の村を守ってくれているし、北の実りの少ない地で暮らす俺たちに食料も与えてくれているだろう。陛下にお世話になっているんだから、その恩を返すのは当たり前だ」

「守る？ でも、こんな自由を奪って檻に閉じ込めているも同然よ」

シユーレの一族は、代々、魂の一部を飛ばし星を詠む術を持っている。星は未来の可能性を教えてくれるのだ。その力を知った時の権力者はシユーレの星詠み達を保護するかわりに、自分の一族にのみ仕えることを約束させた。だからこそ、それと同時に、シユーレの人々は皇帝の許可なしにシユーレの外に出ることはできない。そしてやって自身の元を集めた星詠み達の力を利用して、彼は大陸中に名を轟かせるほどの大国を築きあげた。その権力者が現在のガレ皇帝の曽祖父である。その頃より、シユーレの一族はガレの皇家に仕え、その恩恵として実り薄い北の地での生活を保障されている。

だが、星詠みとて無限に星が詠めるわけではない。星詠みは、魂の一部を飛ばす分、非常に短命であった。命は、星を詠む回数に比例

して縮んでいく。

それを皇帝も知っているはずなのに、ここ数カ月、皇帝から下される命令は減るところからどんどん増えている。外の世界で何が起ころうとしているのかセラは知らないが、現状を考えると、あまりよくないことが起ころうとしているのは確かだった。いや、起ころうとしているというのは適切ではなく、起きていると表現した方が正しいのかもしれない。——というのは、星詠みは確かに未来の可能性を詠むことができるが、星が伝える情報は断片的でそれを正しく解読することは難しいためだ。昔ならいざ知らず、外界と断絶された生活を送る星詠み達にはそれを解読するには情報が少なすぎた。従って、星詠みは星から伝わった情報をそのまま兵に伝えるだけで、今帝国で何が起ころうとしているのか、もしくは起こっているのか知る者は、シューレの中では村長むらおやを除けば全くといっていいほどいない。

兄の考えを否定するわけではないが、だからこそセラには、皇帝が事情も話さずにシューレの人々の日々の生活を人質にとつて、無理難題を押し付けているようにしか思えなかった。

二人の両親もまた、兄妹の生活を守るために命を落とした被害者であつたからだ。

「納得できないならできないで仕方がない。でも、これから先もシューレで暮らしていく以上、受け入れなくちゃならないこと沢山あるんだよ」

優しく諭すような兄の言葉にやはりセラは納得できない。セラは、ふつふつと怒りが込み上げてくるのを感じた。

「兄さんは、父さん達のこと忘れちゃったの？ 本当にそれでいいの？」

その思いを言葉にすれば、やはりセラが望んだのとは違う答えが返ってくる。

「忘れたわけじゃない。だけど、受け入れることにしたんだ」

「そんなのおかしいよ……」

両親が死んだ時の思いを忘れていなければ、受け入れるなんて言葉簡単に出てくるはずがない。それとも、シューレの人は皆、兄と同じように思いを隠し受け入れることで生きているのか。それは、酷く悲しいことのようにセラには思えた。

「おかしくても構わない。だけど、セラもいつかわかる時が来るよ」

わかりたくもない——それが、セラの素直な気持ちだった。

【2】

そんなセラの髪を兄はくしゃりと撫でる。そうされるとセラは、もう言葉を口にできなくなった。すべてを否定してしまうには、この環境を受け入れてきた期間が長過ぎる。セラは村の大人達がこの環境のすべてを「仕方がない」の一言で済ませている姿しか見たことがない。だから皆が兄と同じなのではなく、兄が皆と同じになろうと努めているのだ。そうしなければ兄はきつと、死という恐怖に押しつぶされていただろう。兄が本当は臆病で、死を誰よりも恐れていることをセラは知っている。

「セラ？」

押し黙ってしまったことを訝しがって、兄はセラの名を呼んだ。そこでセラは思考を止めた。先程まで胸の内で燻ぶっていた怒りは形をひそめ、代わりに姿を現したのは恐怖だった。十八歳である兄はもうすでに星詠みの仕事を初めてもよい年頃だ。この先星詠みの命令が下れば、兄はそれを受け入れ続けるだろう。そして迎える先にあるのはおそらく死だ。

兄まで居なくなってしまうては、セラは一人ぼっちになってしま

う。

「……兄さん」

「なんだい、セラ」

「わたし、死ぬなら兄さんより先がいい」

セラの言葉に兄の表情が変わる。大きく目を見開いた後、兄の瞳に浮かんだのは悲しみだった。

「そんなこと言わないでくれよ」

兄の声は僅かに掠れている。セラはそつと目を閉じた後、父の顔、母の顔を順に思い浮かべ、そして最後に兄の顔を真正面から見詰めた。

「それでもわたしは、これ以上家族が死ぬところを見たくないの……」

セラの呟きは、葬列の鈴の音に混じって消えていく。兄はその言葉拾うことなく、無言で再びセラの頭を撫でると、セラに背を向けた。セラには兄の思いがわからなかった。それでもセラは、背を向けたまま後ろ手に差し出された兄の手を取った。

「帰ろう」

手を通して伝わってくる体温がセラを少しだけ安心させた。

家に帰りついた後、セラは受け取った配給で夕食の準備を始めた。シューレの村の家々は石と土で作られた簡素なものである。積み上げた石で壁をつくり、寒さを防ぐためにその上から土を塗り耐熱性を得ていた。さらには暖炉の熱が部屋に行き渡りやすいように部屋の間には壁がなく、寝室と台所を区切るのは、動物の毛を編んで作られた垂れ幕だけだ。

兄は早々に垂れ幕の向こうに姿を消したきり、セラの前に姿を現さない。セラはスープをかき混ぜる手を止め、垂れ幕へ視線をやった。垂れ幕の向こうからは衣が擦れる音がする。兄は何をしているのだろうか。

そう疑問に思い寝室へ足を向けかけたその時、木製のドアを叩く乾いた音が家の中に響いた。

「はい、今、開けます」

セラは門かんばんぎずらし、ドアを開けた。

そこに立っていたのは黒いマントに身を包んだ帝国兵だった。その身体は大柄でセラは恐る恐るその顔を見上げた。

「あの何のご用でしょうか？」

不安げにセラが呟くと、

「わたしはただの付き添いだ」

と彼はその身をずらした。すると彼の背後から、一人の小柄な老人が姿を現した。セラは彼女が誰であるかいたいほど知っていた。押し曲った背中に、木製の杖——シユーレの民の月明かり色の髪は白髪交じりで、より淡い光を放っている。先程通りで目にした時のまま彼女は白い羽織を身につけている。

「村長……」
むらおや

セラの呟きに彼女は木製の杖をとんとと打ち鳴らすことで肯定を示した。袖に付けられた鈴の音が室内に響く。その音を聞いてセラは嫌な予感がした。何より、先程通りで兄が自分に背を向けた行為

がその不安を駆り立てた。

そんなセラの背後で、垂れ幕が擦れる気配がする。同時に兄の声が響いた。

「村長むらおみ！」

「迎えに参ったぞ」

村長の視線はセラを通り越して、寢室から姿を現した兄へと向いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7898s/>

星詠みと流星

2011年9月2日22時04分発行